

戦前日本の幼児教育理念に関する一考察

—富士見幼稚園と創設者の大倉邦彦を中心に—

大岡 ヨト

はじめに

本論文は、戦前日本の教育理念について考察することを目的とし、その一例として 1924（大正 13）年設立の富士見幼稚園とその創設者である大倉邦彦（1882—1971 年）の教育理念に関して分析するものである。すなわち、戦前日本の幼稚園において、どのような幼稚園教育理念に基づいて保育がなされていたのか、その実態を明らかにするための基礎研究として、富士見幼稚園における教育実践を考察したいと考える。

大倉邦彦は、大倉洋紙店・特種製紙・大倉製作所などの事業を社長として経営し、また図書館用品販売の五輪堂を創業するなどの実業家である一方で教育事業家でもあった。すなわち、大倉は 1924（大正 13）年に富士見幼稚園、1928（昭和 3）年に農村工芸学院、1930（昭和 5 年）に浄牧女子工芸学院を設立主宰する。そして 1937（昭和 12）年から 6 年間、東洋大学の学長も務めている。さらに言えば、学生寮を複数個所に設立したり、母親学校の設置、富士見日曜学校（1929 年）の設置にも精力的に取り組んだのであった。また、1932（昭和 7）年には日本の文化伝統を継承し発展させていくために、大倉精神文化研究所を創設して精神文化事業も手掛け、自身の執筆物や研究文献も多く残した思想家でもあった。大倉邦彦は、すべての人には「宇宙心（神のような存在）」から与えられた一生の間で成すべき使命、すなわち「LIFE WORK（使命事業）」があると考えていた¹。大倉はこの使命感に基づいて上記のさまざまな事業に取り組んだのであった。

大倉邦彦に言及した主な先行研究としては、『大倉邦彦伝』（1992 年）、『財団法人大倉精神文化研究所沿革史稿本』（1996 年）、『財団法人大倉精神文化研究所沿革史稿本第 2 冊』（2000 年）、『講演集 大倉邦彦と精神文化研究所』（2002 年）などがある。これらは財団法人大倉精神文化研究所による独自の調査研究によるものであり、多くは大倉邦彦の事業や思想に関する回想録や講演録、大倉精神文化研究所の沿革史に記されるような歴史的対象の記録に留まっている。特に、富士見幼稚園に関する記述は、『大倉邦彦伝』や沿革史においてごく数頁の記載に留まっており、大倉の教育論に言及した研究もないのが実情である。

そこで本論文では、富士見幼稚園における幼稚園教育の実際を知るための基礎研究として、富士見幼稚園設立の経緯やその創設者である大倉邦彦の教育理念に関して考察する。これにより富士見幼稚園における保育の実際を研究する際の足掛かりになると考える。本論文の構成としては、まず大倉邦彦の略歴を簡単に述べた上で、次に彼の教育事業に関するものとして、富士見幼稚園、富士見学びの会、富士見日曜学校の設立の経緯について考察する。そして最後に、大倉の教育思想について分析することとする。

1. 大倉邦彦の略歴

大倉邦彦は1882(明治15)年4月9日に江原貞晴の次男として佐賀県神埼郡に生まれ、1971(昭和46)年7月25日に89歳で没する。

大倉書店で成功した大倉孫兵衛が1889(明治22)年、出版に必要となる洋紙を輸入する大倉洋紙店を開業したのであるが²、大倉邦彦は1906(明治39)年、上海の東亜同文書院商務科を卒業後に大倉洋紙店に入社した。その後、1912(明治45)年、社長の大倉文二の婿養子となり、1920(大正9)年に3代目の社長に就任した。大倉は養祖父の大倉孫兵衛と養父の大倉文二の商売の思想や方針を継承し、大倉洋紙店の発展に寄与した³。

後述するように、大倉は私財を投じて1924(大正13)年には東京の目黒に富士見幼稚園を設立した。そして、1928(昭和3)年1月には、大倉は郷里の佐賀県神埼郡(現・神埼市)に女子の教育施設である農村工芸学院を開設し、院主を務めた⁴。この学院の設立目的は、農村の子女に技芸を習得させ、万一の時も経済的に困ることのないよう、職業教育を受けさせて副業を振興させることにあり、しかもそれが郷土に生産的事業を根付けさせるものになると考えたのであった。また学院は全寮制を採用しており、彼らに正しい人生観を教えることも目的としていた⁵。

そして、大倉は1932(昭和7)年には現在の横浜市の大倉山に大倉精神文化研究所を開設した⁶。大倉は所長として研究所の運営と指導にあたり、各分野の研究者を集めて学術研究を進め、精神文化に関する国内外の図書も収集して附属図書館も開設した⁷。また、1937(昭和12)年東洋大学の懇請により第10代の同学長にも就任し、2期6年の間大学教育にも携わった⁸。

2. 富士見幼稚園開設にあたって

大倉邦彦は1924(大正13)年に東京の中目黒に富士見幼稚園を開設したのであるが、その理由は、「幼児期の学びや体験がその後の人間形成に大きな影響を与えると考え、幼児教育の必要性を唱え」て、「その信念を自ら実現する」ことにあった⁹。開設当時、一般には「幼児教育はさほど重視されてはいなかったが、大倉邦彦は、幼少時代の学び舎体験が人間としての基礎を作り、その後の人生に大きな影響を与えると考え、幼児教育の必要性を訴えた」¹⁰のであった。大倉は「幼稚園時代の教育は、たとえ記憶として意識的には自覚していないものであっても、潜在的な意識として人間成長の基礎を形成するものではないか、またそのことがかえって全人的に後年を支配する場合もあるほど重要ではないかと確信していたのであった。」また、「自らの体験と所信を具体的に子どもに教えることによって子どもの心の情操面を引き出し、おおらかな人間に育てたい」と考えていたのである¹¹。このような考えから、大倉は人間形成の基礎を担う教育機関の実現のために富士見幼稚園を開園したのであった。

富士見幼稚園は1925(大正14)年の4月24日付の申請により、当時の東京府から正式に設置の認可を得た¹²。当初は東京の目黒の自邸に近い中目黒谷戸前の地に建設した¹³。開園当初大倉は園長を務め、保母は日本女子大学校出身の3人で子どもたちの指導に当た

った。園児の定員は 50 名を厳守し年齢ごとに 3 組に分ける教室構成であった。大倉も「ある時は、慈悲深い母となり、ある時は厳粛な父」のように幼児に「話をしたり、歌を歌ったり、運動会には一緒に走り、遊戯を」するほど積極的に交流し幼児教育にも関わっていた¹⁴。

富士見幼稚園の保育のモットーは、「その名のように心身ともに気高く、強く、子供の自然性を培い、協同一致の習慣を身に付け、幼少のころから天皇陛下、みくにぶりの観念を与えられるように心がけて、強く、賢く、親切に」というものであり、入園案内書にもこのことは明確に掲げられていた。東京府への設置申請書における「保育の方針」には、「富士見幼稚園は其名の様に気高く心身共に強い自然な子供を育て、協力一致の習慣を付け、そして幼少の頃より天皇陛下日本帝国又は国際等の観念を与へる様に心掛けて居ます」¹⁵とある。上述した入園案内書のものとは若干の表現の違いはあるものの、子どもの自然性を育み、共に協力する習慣を身につけさせ、日本や国際的な観念を与えることに重きを置いていたことが窺える。

1944(昭和 19)年、戦争の激化のため学童疎開が始まった。このために東京都から休園の指示を受け、5 月 7 日をもって富士見幼稚園は閉園を余儀なくされたが、それまでは毎年 100 名程度の園児を送り出すほどの規模にまで成長していたのであった¹⁶。

3. 「富士見学びの会」と「富士見日曜学校」

大倉邦彦は富士見幼稚園の他にも、良い母親を育てるための成人学校である「富士見学びの会」や卒園した子どもたちを対象にした「富士見日曜学校」も開いた。大倉は「幼稚園経営を通して、自身の目指す精神に相応しい知識と人格を持った人間の養成と、幼稚園から大学まで一貫した方針で行う総合教育が必要であるという思いを強く抱くようになった」¹⁷。以下、富士見学びの会と富士見日曜学校が開設された経緯と理念について述べる。

大倉は幼稚園教育が始まると同時に、毎月 1 回、保護者会を開いた。これは大倉が家庭と幼稚園の連絡を図ることを重視したためであった。そして、この会は次第に幼稚園に関係する母親だけでなく、「一般婦人」もこの会に参加する会へと発展し、富士見学びの会と言われる母親のための成人学校となった。富士見学びの会は頻度が増し、毎週 1 回開催されるようになり、そこでは大倉による講話が約 1 時間なされ、内容としては主に幼児に関する教育問題や時事問題の解説などであった。また、この富士見学びの会は料理や手芸の講座も設けており、年 1 回は持ち寄った品物でバザーを開催し、収益は貧しい人々に対して寄付するという奉仕活動も行っていた¹⁸。

富士見学びの会の主な目的を大倉は以下のように述べている。富士見の学びの会は、2 つの目的の一端を果たすものとして生まれた。すなわち、家庭と幼稚園との連絡を密接にすることと、家の中心指導者である「主婦」の内的活動心を養うことであった。その理由は、「主婦」の態度や考えは家庭においては非常に影響力を持っており、また両親が子どもを養育する方針と幼稚園の保育方針とが一致していなくては、家庭においても幼稚園においてもその教育的効果が現れないと考えていたからであった。大倉は「主婦」が自ら率先

して自身の思想と人格の向上と進歩を成し遂げることで、その精神が種となって生きた教育的使命を果たすことに繋がるとし、それは子ども、ひいては世の中にも大きな影響を及ぼすと確信していた。従って、幼稚園と家庭は常に連絡を取り、密な関係でなければならぬと考えたのである。そして、保育上の研究や相談をするためには母の会が存在することが望ましいとして、この富士見学びの会を設立したのであった¹⁹。

既に述べたように、富士見幼稚園は 1944(昭和 19)年に閉園に至ったが、富士見学びの会は、戦後においても各々の趣味や子どもの学校の父母会を通じ、名称は変化したものの会員相互の交流は続けられた²⁰。これについては、当時の記念写真や回想録などが大倉精神文化研究所に残されている。当時の「主婦」達にとって富士見学びの会は、親自身や子ども、さらに社会全体に対して教育的な意義を持っていたのであり、相互の交流という社会的な面から見ても、大変有意義な役割を担っていたことがわかる。

また、1929(昭和 4)年になると、大倉は富士見幼稚園を卒園した子ども達の将来を考え、同幼稚園に富士見日曜学校を開設した。この日曜学校は日曜日に開校され、幼い子どもだけではなく中学校卒業までの子どもを対象にしたものであった。すなわち、満 6 歳から約 18 歳までの子どもを対象とし、日曜の午前 9 時から 11 時半まで、おおよそ塾のようなものであった。目的としては学校教育の不備を補うためとしていたが、内容としてはその年齢や能力に応じたものであり、そのうち 1 時間余りは時にはおとぎ話や童謡を題材にして大倉が修養的な話をし、あとの時間は補習授業をするという形式だった。補習授業には大学生や大学の卒業生が教師となっていた。授業料は徴収せず、教師の大学生も無報酬であった。教師たちの楽しみは散会後に大倉から昼食がもてなされ、児童教育に関する講話を聞くことにあったという。尚、同年 11 月には日曜学校を母体とした機関誌で、主に幼児の教育問題を扱った雑誌である『心の使』も刊行されている²¹。

4. 大倉邦彦の教育に関する思想—大倉邦彦著『感想』から—

上述したように、大倉邦彦は富士見幼稚園の開設のみならず富士見学びの会や富士見日曜学校といった、教育の対象を幼児以外に広げ、その保護者や幼児のその後に対してもその教育的支援を行った。以下では、大倉が教育者に対してどのような実践をすることを掲げ、また当時どのような家庭教育が必要であると考えていたのか、さらに教育全般についてどのように考えていたのかについて、大倉が綴った『感想』の中から概観してみたい。

(1) 教育者に関して

大倉邦彦は『感想』の中で、「教育者の純真な子女の心田を耕すには、其心田に飛び込まなければならぬ。下駄穿きのままや、遠方からは、種子も蒔かれず、培ひもされない」²²と述べ、教育者というものは子どもに対して真摯に向き合い、自身を投げ出す姿勢が重要であるとしている。さらに大倉は、「真の教育は人格の交換から生れる」として、その事を知らずに「顔さへ見れば、教へる態度を取りたがる教育者がある」ことを批判している²³。また、「力車は原動力によつて動かされ、そして原動力を助ける様に」という例を用いなが

ら、「教育する人は、教育される人を教育すると同時に、教育される人から教育せられる事を忘れてはなら」ない、つまり「教育者ぶるのは禁物」として教師自身も教育されるものであり、かつ成長するものであると述べている²⁴。

さらに、大倉は教育者が研鑽を積むことや誠意と熱意ある教育をすることの重要性を繰り返し述べている。例えば、教師が生徒に対して媚びたり妥協したりして、厳格に信じる所を主張したり、涙を流して偽りのない心を吐露する様なことが少なくなったことが、結果として生徒からの尊敬や信頼を失い、「相互に義務と御座なりで、日を暮す」ことになったと嘆いていた²⁵。そして、教育者自身の修養がそのまま教育となる考え、児童は無心にして自然であるため、教育者自身がより自然な子どもの心に合う精神を持てるよう、自由を奪うような態度から脱し、心は自然と児童の心と合流し感化することが大切であると考えていた²⁶。大倉は教える者の誠意と熱意は学ぶ者の意気込や努力を誘発するものであるから、教える者はそれらを持った「発動機」のように働きかけなければならないと述べている²⁷。この他、「教へ方、話し方、書き方は着物の着こなしや生花^{マヅナ}みた様に、同じ材料を取扱つて居り乍ら、大した違ひがある。材料のみに眼がくれるものは、訓練を疎かにする」²⁸とも述べ、教育者の訓練の大切さにも言及している。大倉は特に教育者だからといって智徳の完全を要求しているわけではなく、常に不完全から完全へと努力する熱意と誠意こそが教育者にとって最も大切であり、「己を知り、己を養ひ、己を研いた結果其こぼれが感化であり、教育である」²⁹と考えていた。一方で、大倉は教育者になるには上述したような重要な資質というものがあり、下手な料理は如何に材料を並べても食べられないことを例にして、教育者としての資質は人々に与えられた生得的なものであるため、妄りに教育者となるべきでないとも述べている³⁰。

(2) 家庭教育に関して

大倉邦彦は当時広まりつつあった、自由教育や子ども中心の行き過ぎた教育を批判して、その過度な放任的な姿勢を罪であるという考えを持っていたようである。大倉は以下のように述べている。「子供の成長を喜ぶ親は、子供が思想的に変つた事を云ふのを聞いて、或は無批判に、それが子供の進歩だと喜び、或は心配しながらも、社会感化の強さに押されて、其儘放任する。かくして家庭教育を無力にし、破壊に導きつつある。」³¹また、大倉は親は時には「主」と「従」との立場を兼ね備える必要があることも考えていた。例えば、父が子どもの為に馬となつて子どもを喜ばせ、相撲の相手となつてはことさらに負ける場合は、子どもが「主」で父は「従」である。しかし教育的に見れば、馬や力士となる父は「主」であり子どもは「従」である。このような「主従の立場を兼備」することが成功の道であることを述べている³²。そして、親は子どもと共に朝夕の行事を行って生活基準の共通を保つ事が、最も良い家庭教育であると述べている³³。このように大倉は、親は子どもに対して主従の関係を兼備し、朝夕を共にして自身も変化しながら子どもを躾けなければならない、ただ子どもを放任したり心配するだけのものになるべきでないと考えていたのであった。

大倉が良き親のための成人学校である富士見学びの会を作ったことは、上述したような考えがあったためであり、「子供は親の延長であり影である」からして、「其元を直さず、其の本体を正さずして、子供にのみ求めるのは、無理な望みである」³⁴と考えていた。すなわち、子どもの教育は親自身の教育に立ち返って行われる方が早道であるという思いがあったためである。

(3) 教育全般に関して

大倉邦彦は教育はあるがままをあるべき様にすべきと考え、あるがままの物をもってあるべき様に作り上げることが人間の創造であり、「自然人をば、人世に役立つ様に育て上げるのが教育である。人は先づ自他の為の教育者であらねばならぬ」と考えていた³⁵。また、大倉は「生活資料を得るために、猿廻しが猿に芸を教へ込む様な気持で、親が子供を遊学させる向が少くない」ことを批判し、「若し教師も生活資料を目的に教鞭を取り、学校も卒業生を売り付けることにのみ腐心して、真の教育を施さなかつたら、教育は商売に等しい」³⁶として、教育は生活の手段ではないことを指摘している。そして、個性の育成については、個性の尊重開発が近代教育の新発見のように言はれているが、個性は単に尊重すべきものではなく、考慮してそれを指導すべきものであると考えていた。なぜならば、単なる個性の尊重は誤りと我儘に導くのみであると考えていたためであった³⁷。

また、大倉は教育のねらいについては体験的指導であるとし³⁸、教育の基礎については、欠点を気にしてそれを取り去ることに努めるよりも、芸術家が作品を創作する前にまず理想表象を意識する様に、望ましい状態を描いて念願する方がより確実な効果が得られると考えていた³⁹。すなわち、教育においては子どもの欠点にばかり注視してそれを取り除くことに意識を置くよりも、望ましい理想の全体像に向けて教育することを重視していたのであった。そして、「正しい確信と深い信念とは無言の中に人を感化する。是が真の教育であらねばならぬ。教授法や、訓育論や、管理法は抑々末節だ」⁴⁰と言及し、方法論などの前に人の考えや情緒を変化させるものがあることを指摘している。

大倉は例えをしばしば用いる。例えば、「野薔薇を培ひ肥料を与へても、矢張り同じ野薔薇より咲かないのに、よき薔薇を接木すれば本木の花は咲かないで、接木のよき花が咲く。よき教育は本性を終生善化するのも此自然原理ではあるまいか」⁴¹と記している。すなわち大倉は、子どもに関わる際には、たとえ後になってからでも努力して良い子どもに変化するように携わることが大切であり、本性を善化することも自然の原理であると考えていたようである。このような思想も、幼稚園段階から子どもの教育に携わりたいという考えに至り、富士見幼稚園を創設することに繋がったと推察される。

この他、「現代教育は、余りに観念的、形式的、劃一的であるから、生徒に感激を与えないのみならず、社会と隔離して下り、外国思想追随と、語学偏重と機械的模倣とは、国体に関する認識を欠き、学生をして日本より遠ざからしめた」として、大倉は当時の教育について「魂なき教育」として痛切に批判もしている⁴²。また、女子の可能性にも言及し、「民力の増大を望むなら男子よりも遥かに女子に可能性が多い。永い間被圧階級として取扱は

れ、力を伸す余地がなかった女子は人口の半数を占めて居るから、此処に眼をつけなければならぬ」とも述べている⁴³。既述したように、もとは子どもの教育にはまず母親から固めなければという考えのもとに作られた富士見学びの会だったが、背景には大倉がこのような女子の力の重要性も認識していたことも関係していたのではないかと推察される。この女子の力に関する考えは、既出の女子のための教育施設である農村工芸学院の設立(1928年)へと繋がっていると考えられる。

ところで、幼児向けの雑誌は明治 20 年代に登場し、大正デモクラシーの潮流と戦後の好景気によって、『コードモノクニ』や『キンダーブック』といった数多くの幼児雑誌が相次いで創刊されたのであるが、この『キンダーブック』が創刊された時に使用された用紙は、大倉が社長を務めていた大倉洋紙店から納められていたのであった⁴⁴。実際、富士見幼稚園では、『コードモノクニ』や『キンダーブック』といった幼児雑誌が多く用いられており⁴⁵、このことから、大倉が早い時期から幼児教育に関心を持っていたことと、子どもにも文学性や芸術性を波及させ、人々の教育意識の高まりに一役かっていたことが窺える。

おわりに

上述したように、大倉邦彦はすべての人には一生の間で成すべき使命事業があると考えていた。この信念を自ら実現するために、諸々の教育機関や研究所を創設したのであったが、特に大倉は幼児期の学びや体験が人間形成に大きな影響を与えと考え、幼児教育の重要性を確信していた。このことが富士見幼稚園創設に至り、そこでの教育方針も大倉の考えが大きく反映されていた。すなわち、大倉は教育者というものは子どもに対して熱意と誠意を持って真摯に向き合うことが大切であり、しかも教育するだけではなく教育されるという学び合いの姿勢や体験的指導を強調していたのであり、このことは本論文で確認した。また大倉の教育に対する熱意は、幼稚園設立のみならず成人のための学校や卒園生を対象にした学校も開設したことによく表れていると言えるが、本論文で明らかにしたように、大倉は子どもの教育のためにも親、特に母親の教育が大切であると強く考えており、また男子のみならず女子の力も積極的に社会で発揮させるべきであると考え、女子教育も重視していたのであった。1932(昭和 7)年から現在にまで続く大倉精神文化研究所も、以上のような総合教育が必要であるという大倉の思いが契機となってその実現へと繋がっている。

富士見幼稚園は 1944(昭和 19)年、戦局の悪化によって閉園に至るが、その後、幼稚園で使用された出席簿、入園申込書、幼稚園日誌、業務日誌、遊具、幼児雑誌等の関連資料は大倉精神文化研究所に移され、「研究所沿革史資料」としてまとめられている。今後の課題としては、これらの分析を進め、富士見幼稚園が当時どのような保育理念を持ち、どのような実践をしていたのかについて詳しく考察していくことである。また大倉の財力に下支えされていた富士見幼稚園は、特に開園当初は比較的資金に余裕のある施設であったことや、その職種からも雑誌などの刊行物や印刷物が豊富であったことが窺い知れる。そのような環境的背景から織りなされた当時の保育とはどのようなものであったのかについても

今後考察していきたい。

注

- 1 財団法人大倉精神文化研究所編『大倉山論集』第 57 輯、財団法人大倉精神文化研究所、2011 年、320 頁。
- 2 大倉洋紙店は、数回の合併や会社名変更を経て、2005（平成 17）年に「新生紙パルプ商事株式会社」となり、紙・板紙・フィルムを中心に、国内外に幅広く販売する紙の総合商社として現在に至っている。
- 3 財団法人大倉精神文化研究所編『大倉邦彦伝』財団法人大倉精神文化研究所、1992 年、28-35 頁。財団法人大倉精神文化研究所編『講演集 大倉邦彦と精神文化研究所』、財団法人大倉精神文化研究所、2002 年、54-56 頁。
- 4 院長は邦彦の実兄の江原貞一が務めた。尚、農村工芸学院は 1931（昭和 6）年 4 月に国民女子工芸学院、1933（昭和 8）年 4 月に国民家政学院と改称した。1938（昭和 13）年に廃校となった。
- 5 前掲『大倉邦彦伝』55・56 頁。
- 6 1936（昭和 11）年に文部省所管の財団法人として認可された。
- 7 前掲『大倉邦彦伝』80-85 頁。
- 8 『同前書』149 頁。
- 9 財団法人大倉精神文化研究所編『大倉山論集』第 58 輯、財団法人大倉精神文化研究所、2011 年、341 頁。
- 10 前掲『大倉山論集』第 57 輯、324 頁。
- 11 前掲『大倉邦彦伝』51 頁。
- 12 東京都公文書館所蔵。
- 13 『同前書』51 頁。
- 14 『同前書』52 頁。
- 15 東京都公文書館所蔵。
- 16 『同前書』54 頁。
- 17 前掲『大倉山論集』第 57 輯、324 頁。
- 18 『同前書』53 頁。
- 19 『同前書』53 頁。
- 20 『同前書』54 頁。
- 21 『同前書』54・55 頁。
- 22 大倉精神文化研究所編『大倉邦彦の『感想』一魂を刻んだ随想録一』、大倉精神文化研究所、2003 年、76 頁。
- 23 『同前書』67 頁。
- 24 『同前書』76 頁。
- 25 『同前書』193 頁。
- 26 『同前書』114 頁。
- 27 『同前書』288 頁。
- 28 『同前書』233 頁。
- 29 『同前書』28 頁。
- 30 『同前書』216 頁。
- 31 『同前書』113 頁。
- 32 『同前書』142 頁。
- 33 『同前書』241 頁。
- 34 『同前書』260 頁。
- 35 『同前書』98 頁。
- 36 『同前書』167 頁。

-
- ³⁷ 『同前書』 140 頁。
- ³⁸ 『同前書』 356 頁。
- ³⁹ 『同前書』 24 頁。
- ⁴⁰ 『同前書』 28 頁。
- ⁴¹ 『同前書』 41 頁。
- ⁴² 『同前書』 192 頁。
- ⁴³ 『同前書』 44 頁。
- ⁴⁴ 前掲『大倉山論集』第 58 輯、341 頁。
- ⁴⁵ 使用された昭和初期の幼児雑誌については、残欠本も含めおよそ 180 点が大倉精神文化研究所に所蔵されている。